

ときかわお葬式なんでも相談室

おじぞうさんの独り言

2018年 平成30年 年の暮号 Vol.41

発行

総合葬祭・想々ホール

合資会社 ときかわ

静岡県三島市中央町3-24

電話 055-975-0182

fax 055-973-3011

編集：日本葬祭アカデミー

年の瀬の世間は、なんとなくあわただしくなりますが、私たちの葬祭業務は、暮れもお正月も関係のない、年中無休の24時間待機と云う仕事です。

◆嫌なことも考えておく余裕
死の多くは、突発的、緊急的で、直面する人の戸惑いや心痛は大きな悲嘆です。そのために、普段の生活の中で「死」は絶対に考えたくないことです。そういう心理を「葛藤回避」と云います。これは誰もが有するごく普通の気持ちです。

さて「災」の豪雨や地震など、自然災害の多くは、事前対策の不備を後になって指摘されることも多々あります。「想定外」「予想外」と云う言い訳で責任が曖昧になります。

河川の氾濫や地震の被害には、遠い昔の記憶や記録もあり、その教訓が生かされていないケースも数多いものです。

それは災害を「考えたくない」という思考回避の「人災」かもしれない。

過去の事例を顧みず、対策を怠ってしまう。周期性はあるが、今日明日ではないと云う、根拠のない確信が、対策の先送りになり、その過ちを繰り返しているのが現代ではないでしょうか。

その年をイメージする漢字に『災』の一字が揮毫されました。皆様にとってはどのような年でしたか。

年の瀬に
振り返る一年

◆お迎えを待つこと

災害ではありませんが、「死」が避けえない事実であるにも関わらず、それに対していつまでも「葛藤回避」のままでもいいものでしょうか。

確かに「死」は考えるのも嫌で、ある意味「待つ」事柄かもしれない。そうすると現代社会は、「待つ」ことにおいて、たいへん下手な社会になってしまったと思います。

社会全体が前のめりになって、いまや、待てない時代に突入しています。

「お迎えが来るのを待つ」と云う老境の余裕も喪失しました。



年の暮れの風物「アメ横」の賑わい

「終活」という言葉も勘違いされ、待てない死に際しての準備「活動」のように考えられています。終活と云うのは、自身の終えんを意識したうえで、どのように「生き生き」とした人生を過ごすか、と云うべき言葉です。確かに想定されている人の死は、なるべくなら、ゆるやかに、そしておだやかに訪れてもらいたいものです。

その来訪をいつの日か待つならば、そこには相応の心づもりをしておかねばなりません。

エンディングノートはそのための整理帳で、実務的な覚書きだけではありません。

何よりも、どのような覚悟で「お迎えを待つ」という心の在り方を固めておくためのものです。性急さは必要ではありませんが、過去から連なる供養がどのようなにされているのかを知る事が大切です。

いまではこれを「学び」から感じなければなりません。

葬祭業としてその確信のもとに継続的なセミナーを開催しています。機会があれば是非ともご出席ください。



片時もスマホを離せない待てない社会

2019年 第一弾 ～お葬式やお墓と供養の問題点～ 市民のリクエストでテーマ設定しています。

1/31
(木)

恒例！ ときかわエンディング生活塾

日時 2019年1月31日(木) 10:00～11:30

会場 三島商工会議所 4階 会議室

参加費 無料 (原則申込み・当日受け付けも可能)

◆参加特典・マイ・エンディングノート贈呈
(市価1,400円)

テーマ 冠婚葬祭互助会の消費者問題
国民生活センター報告から

講師
日本葬祭アカデミー
二村祐輔氏

ときかわ
お葬式なんでも相談室

セミナーお申込みお問い合わせはどうぞこちら 電話 055-975-0182

第17回

心にしみる折々のしきたり
◆葬祭学入門

厄(やく)の文化:

「厄」(やく)を広辞苑でひも解くと、

『①くるしみ。わざわい。災難。

②やくどしのこと』などとしてあります。けれども、なぜそのような災いを「厄」と云うのかの解説はありません。

字形的には、「尸」(がんだれ)とその中にある「厄」(ふしづくり)で成り立っています。

一説にはがんだれは崖の象形で、中のふしづくりは、人のうずくまった形だそうです。同じような部首構成では「危」があります。崖の上から人が覗き込む様子を表して、まさに危ないですね。

さて来年の厄年に触れてみますと、すべて「数え年」で、男は25歳(平成7年生)、42歳(昭和53年生)、61歳(昭和34年生)となります。女性は19歳(平成13年生)、33歳(昭和62年生)で、前後の年を前厄、後厄と定めています。とくに男性の42歳、女性の33歳は「大厄」として凶事への注意を促しています。

また川崎大師のように「満年齢」で年を数えることもあり、その処方はいろいろです。大切なことは、順調といえども、どこかで自戒の念を持つこと。年齢的には、男女共、社会的な節目や体調の変り目となる歳です。これらの除災を神仏に頼る謙虚さこそ、私たちの感性のバロメーターと云えます。



33

シリーズ ワンポイント お葬式や供養の実務知識
お手元に一冊! おいておきたい本

監修: 日本葬祭アカデミー教務研究室

この度、新改訂として『葬儀・法要・お墓・相続の心得事典』を刊行することになりました。改訂前の本は、実に55版以上の重版で、葬祭の手引書としては、いわばベストセラーです。それだけわかりやすい内容ですよ。

今回の新改訂では、葬儀やお墓のこと(墓じまいなど)、またその後の供養などについて、定例セミナーでおなじみ、日本葬祭アカデミーの二村祐輔が監修しています。

それに加えて、相続や遺言など事務手続きの具体的な事例を専門家である行政書士キートス法務事務所代表の汲田健氏に監修していただきました。汲田先生は、毎年、ときかわ主催の「手作り葬祭フェア展」(三島商工会議所でのイベント)で、後見人や相続・遺言やその事務委託など、各種の制度についてわかりやすくお話をされています。

来年2019年の6月にもそのイベントを開催予定です。(詳しくは「ときかわ」まで)これは是非お手元に置いておく心安心の一冊になります。葬祭の考え方や施行のこと、その前後にある実務的な相続対応や遺言、事務手続きのことを両方合わせて記載しています。稀少な本です。是非この機会に書店でお求めください。(この記事をお見せください)

2018.11発行の最新版。定価1250円(税別) 発行者 池田書店



お地蔵さんの独り言

最近、ペットのご供養にも、私たちが参るような世の中です。「ペットは『極楽』に行けるのかしら」と尋ねる方もいます。

仏教的な供養観では、人とそれ以外の動物は厳然と異なつた世界へ赴くと云われていますが、まあ長年「家族の一員」として愛玩されてきたペットですから、できれば一緒に埋葬してもらいたいという希望者もいます。

人間社会とペットとの関係は、太古から綿々と続いてきました。とくに犬などは、その嗅覚や敏捷性から狩猟や生活の補助として役立ってきました。縄文の遺跡からは手厚く葬られた犬の墓なども出土していますよ。(愛媛県久万高原町上黒岩の岩陰遺跡で出土した犬の骨の年代は、炭素年代測定で約7千年前のもの)

とくに私たち日本人は「ペット」だけではなく、魚や鳥、またいろいろな「モノ」に対しても愛着を持って死後や使用後も「供養」します。

今年の4月には6回目となる「AIBO」

葬が千葉県のお寺で営まれました。

アイボと云うのは、ソニーが売り出したロボットの犬。

魂の落ち着く先の霊場は、人でもモノでも、もっと賑やかにあります。

私たちお地蔵さんの菩薩行供養も、まあこれから大変です。



霊峰富士は魂の行き着く最高の場所と云う信仰もあります。
2018.12.14 撮影 やまもとえいじ

年末年始の緊急時にも慌てないでご連絡ください! 常に待機しております。
ご遺体の搬送や専用の保管設備も自社対応。
..その後のご葬儀など、年内可能かどうか?
..また年明けならば、いつ施行可能か?等々..
この時期は特に戸惑うことばかりです。
安心してご相談ください。

- 安心の葬儀社 ときかわ
- ◆個人情報管理適格事業所であること! (三島市唯一) PIP認証(プライベートインフォメーションプロテクト)取得
 - ◆市民向けの情報発信を継続的にしています! 商工会議所での定期セミナーや会報紙発行(本紙)
 - ◆信頼のおける事前相談が気軽にできます! 知識豊富な葬祭カウンセラー認定者が対応
 - ◆病院搬送からご遺体保管まで初期対応も安心です! 専用の斎場ホールを所有・家族葬から一般葬まで



葬儀社選択の要は PIP認証
「個人情報の守秘管理」の適格表明!

ときかわ フリーダイヤル 0120-100-182



三島市役所となり
おじょうさんが目印